

裾野麗峰山の会・山行報告書	文・I K	写真・G T
山行NO.	1906	
日時	2021年2月13日(日) 無風快晴・高温	
山域	八ヶ岳・横岳(2829m) 杣添尾根	
コース	長泉5:00-海ノ口別荘地発7:40-三叉峰11:40-横岳11:58-2615m 森林限界の上まで下りて昼食12:50~13:18-下山開始13:20-駐車場着15:40(先着15:03)-長泉着18:40	
標高差	上り 約1750m~2829m=約1079m 下り 同上	
藪漕度	なし	
難易度	非常に困難 困難 <u>レ</u> やや困難 普通 やや易しい 易しい	
参加者	後藤、加藤、勝又、井上=4名	

## 今年は春山、されど4カ月ぶりの山洗礼

昨年は2月8日(土)に登り、ほぼ同じ時期の同じ山である。後藤さんと加藤さんは、前日移動前泊。勝又さんと私は、当日移動。

天気は快晴。赤岳もこれから上る横岳も何も遮るものはなくくっきりと青空に浮かんでいた。

別荘地の駐車場につくと、同じ沼津ナンバーの車が到着。後藤さんの顔なじみの人のようだ。男女のペア。その他に若い男女のペアがいて、先に出発した。



右・元会員Y(真ん中の女子のアイゼンに注視!!)

カッパのズボンを選び、スパッツ、1本縛りアイゼンを付ける。革靴とアイゼンで合わせて片足約2kgの重さ上は長袖Tシャツにマイクロフリース。サングラスに、ニット帽子、ネックウォーマ





一、手袋は3枚セット。昨年、下山後しばらく両手中指がしびれていたの、今回はミトンのなかにカイロを入れた。昨年の失敗は、初めからゴーグルをつけて登り、森林限界より上で吹雪き、ゴーグルが凍って何も見えないですごく不安だったとことと、手指のしびれが残ったことだった。今回はサングラスとカイロで対策をした。しかし、本当の問題は、年末年始の海外出張などで、4カ月ぶりの登山で標高差1100m近くの雪山に体が耐えうるかどうかだった。

勝又さんは昨年、三叉峰で引き返したので今年は1年越しのリベンジだ。森林限界までは森の中とはいえ、雪がしっかりある。いつもの沢を渡ったが、先行者の足跡はなく、本来の登山道から行ったようだ。我々は、いつものコースに行くがラッセルが必要だった。加藤さんがまず行った。





鹿の足跡を追いかけるラッセルだった。次に私が行った。  
 ここ数年の登頂時間（後藤）

2021、2・・・7：40～12：00＝4時間20分  
 2020、2・・・7：45～12：00＝4時間15分  
 2019、1・・・7：20～11：40＝4時間20分  
 2018、1・・・8：35～11：53＝3時間18分  
 2017、1・・・7：50～12：09＝4時間19分  
 2016、3・・・7：00～11：10＝4時間10分  
 2015、なし  
 2014、3・・・6：30～11：05＝4時間35分  
 2013、1・・・7：05～10：55＝3時間50分

林道に出て池のある東屋に来ると、他の足跡と合流した。まずは3時間の森の中の尾根歩き。ひたすら森の中の雪道を登る。非常に退屈。汗がサングラスに落ちて視界を邪魔し流れ落ちていく。ピッケルを雪に刺して、イチ、ニと歩いてみたり、後藤さんの足の運びをまねしたりしながら、とにかく我慢、我慢。

単独の男性が追い抜いた。後で聞くと、大阪から400km車で来て、3日間登るらしい。あと3年で退職なので、引退後は長野に家を建てて、1週おきに山と大阪と生活をしようと目論んでいると



のこと。1日でもたいへんなのによく3日連続で雪山に登れると感心した。

だいぶん登ってから、左手に富士山が現れた。雲海の上に雪でまだらの筋を付けた富士山。まるで浮世絵を見ているかのようで、見惚れてしまった。やっと見るものができて気分転換になった。あとは森林限界を抜け、雪山の世界に入る。

左右の両サイドが切り立った尾根の上を歩くのは爽快だ。去年は、霧で視界も悪く、足元に注意してかなり慎重に歩いた。今回は風がなく、景色も360度快晴でいうことなし。しかし、森林限界





を超えたところで私の太ももは筋肉痛になって、悲鳴を上げていた。

そこから三叉峰までの雪は昨年の方が多かった。見上げると、ペアが3組と大阪の単独男性が見える。登りのスピードは私たちとほぼ一緒。なんとか三叉峰まで上がった。横岳まで一度下り、はしごを使って頂上へ。昨年は一人頂上に登らせていただいたが、ホワイトアウトと凍ったゴーグルのスクリーンのため、まわりは何にも見えなかった。

今年は、すごい。きっとこれ以上の天候、風景はないし、もしかしたら、もう二度とこの景色を見ることはないかもしれない。頂上で写真を撮って下る。雲海の上の富士山に向かって歩く。ここ





から 50 分下り、ビールを飲んでも足元に心配のない森林限界の少し上で昼食休憩。加藤家特製ワインをいただき、これをビールでわると、この上なく美味しかった。

下りは、ただただ、森の中の雪の道を単調に下り続ける。途中でアイゼンを外す。足が軽い。そして、荷物が重くなった。足が楽になり嬉しいのもつかの間、アイゼンを外したため、かかとで蹴りこんで下ればよいのだが、足が痛くてできない。ほとんど横歩き。

100 歩数えては休憩する。痛さと、呼吸のしんどさ、のどの渴きで、勢いよく下りられない。この辛さは、山を始めたころに体験した燕岳の東沢コースの時以来ではないか。4 ヶ月山に行かないことがどういうことか身にしみてわかった。

前を行く 3 人からどんどん遅れていることは分かっているが、亀のように足を前に出すことしか





出来ない。別荘地に入ったが、駐車場から来たコースを忘れて別荘地内で迷った。住人に駐車場の場所を聞いて歩く。加藤さんから電話がかかってきて状況を説明。かなり長い時間待ってれていたようで、後藤さんと加藤さんは、先に出るとのこと。ようやく駐車場につく。

昨年は昼食後の下りは1時間48分だったが、今回は2時間20分かかった。半分以下のスピードさかと感じていたが、実際は9割くらいだったので意外だった。

皆様、ご心配おかけし、申し訳ありませんでした。帰宅して見てみると、左足のアキレス腱辺りが腫れていた。

以上



## その他の記述（後藤）

1. 登山口で昨年も会った別荘のご夫婦とバッタリ。聞けば、ご夫婦は和歌山県の方だった。別荘は大きく立派。冬は零下20度になるこの地では、管理人に頼めば、到着前に暖房をオンしてくれるそうだ。使っている車は、ピカピカのボルボ。まだ若いように見受けるが、このような方は、一体、どのような生活を送っているのか・・・。
2. 男女2名の隣の車が沼津ナンバーだったのでお声がけをした。話してみたら、男性は元会員、裾野のYだった。退会したが山は続けているようだった。ただ、相方の女性が笑ってしまった。Kが「そのアイゼン、変わっているね」と問いただしたら、何とアイゼンを前後に装着していた。私も長く山をやっているが、そんな光景は、初めて見た。つまり本来、飛び出ている12本目の爪は、つま先方向に装着するが、何故か「かかと方向」を向いていた。いやいや、それでよく装着出来たと、「妙に感心してしまった」が、そのような方が冬山志望なのかと、考えてしまった。
3. 大阪から来たという、中年男性は森林限界で抜いて行った。ここまでアイゼンを履かないで来た。ただ、何故か下山は最後まで履いていた。逆だと思うが・・・。
4. 横岳を下って行くと、前述の元会員Yは、標高約2600m付近にいた。相方の女性が「これ以上、上れないから、ここで終了」といった。結局、Yもここで終わった。
5. この日の登山者は、10名くらい。ま、若い衆が多い。我々のような70歳代は稀有だ。

